

言語学と社会学のインターフェイスに基づく「前方－交換」概念の研究 —語彙概念の導入による効果的な語彙習得へのアプローチ—

福森 雅史・高橋 紀穂

1. はじめに（福森 雅史）

近年、国立大学法人を始めとする教育機関において「ファカルティ・ディベロプメント（[英語] Faculty Development / [西語] Desarrollo de Facultad）」（以下FD）という言葉が叫ばれている。このFDとは「大学教員の教育能力を高めるための実践的方法」のことで、大学の授業改革のための組織的な取り組み方法の中でも大きな位置を占めており、近年ではFDに関する研修も定期的に開催されている。このように、FDに対する関心が高まっている一方で、以下（1a-e）に見られるような課題も指摘されている。

(1) a. 研究のアクティビティで授業力がきまる

教師の自信と熱意が授業力の源泉である。魅力ある授業、わかりやすい授業は自らの専門を極める事によって実現する。

b. 創意工夫があるほど授業の満足度が高い

教科書頼りの授業はいままで受けてきた初等中等教育で学生がウンザリしている。教師が自ら作成したオリジナルな教材を授業に活用するための日ごろからの研鑽が求められる。

c. 教科ごとの産業界で役立つ人材像があるか

何のために学ぶかの動機づけが大切である。教師は学外の研究会、企業との共同研究などを通じて社会のニーズの変化を知ることが必要である。

d. どんな変化をおこしたか

新しいことでイニシアティブをとる教師の姿勢が学生の心を動かす。教師は孤立を怖れず勇気をもって新たな試みをすべきである。

e. 卒業生にとって心のよりどころになっているか

卒業生からどれだけ相談を受けたか、これに対して適切な支援ができたか。これも大学のレベルと教師の力量のバロメーターである。

— 中村（2004：46）（一部変更筆者）

このような課題を解消するためには、もはや特定の一分野のみに偏重した視点からの一方向的な研究に限定するのではなく、少なくとも言語の本質を明らかにするためには、隣接科学をも融合した形での多方向からの視点による研究こそが必要であると考えられる。なぜなら、言語とは単なる記号などではなく、我々人間の思想の歴史が如実に刻み込まれたものであり、人間の心そのものが反映された外界認識の心象表示だと言えるからである。これは見方を変えれば単なる記号として言語を取り扱うのではなく、我々の生活様式や文化、ひいては歴史に至るまで考察の対象に加えなければならないということを意味する。それ故、現在、言語を研究するには、玉野（2008：5）で「究極的には物質的な生活条件によって規定される歴史の流れの中で、人びとの主観的な意識や社会的な観念、さらには人と人との具体的に日々関わり合う相互作用のあり方によって、その歴史の流れにどのような限定的な、しかしときとして決定的な影響をもたらすかを明らかにしようとする学問原理」と定義されている「社会学」¹⁾や祖父江（1990：2）で「世界のさまざまな民族のもつ文化や社会について比較研究する学問」と述べられている「人類学」²⁾の知識が必要不可欠なものとなっているのである。その上、学習者にとっても、機械的な丸暗記ではなく隣接科学を利用した新しい視点からの説明を与えられることでより論理的理解が可能となるだけでなく、知的好奇心をも刺激されることで、学習自体に対する意欲も向上すると考えられるからである。

そこで、本稿では、かなり複雑な多義構造を持っていると考えられるスペイン語前置詞 *por* とそれと語源を同じくする接頭辞 *pro-* を採り上げ、従来の言語学の視点のみからでは説明しきれなかったその意味変化の過程を近接科学である社会学および人類学の視点から観察することで明らかにすることを目的とする。加えて、こうした社会学および人類学の視点からの説明を実際の言語教育の現場に導入・活用した場合、如何なる効果が得られるのかについても論旨は及ぶ。

2. スペイン語前置詞 *por* に見る「前方」／「交換」／「近接」概念の結びつき（福森 雅史）

2.1 スペイン語前置詞 *por* が持つ概念

スペイン語前置詞 *por* は、次の（1）に示されるように、古典ラテン語 *prō* に由来する³⁾。

（1） del lat. *vg.* *POR*, alteración del lat. *cl.* *PRO* ‘por’, ‘para’.

（‘por’, ‘para’ を意味する古典ラテン語 *PRO* の変化形である俗ラテン語 *POR* から。）

— *Corominas* (s.v. *POR*, *prep.*)（日本語訳筆者）

この古典ラテン語 *prō* は、下記（２）に見られるように、

- （２） *Per* fait partie d'un groupe de prépositions et préverbes auquel appartiennent *prō* et *por-*, *prae* et se rattachent d'autre part, *pri*, *prior* et *primus* (v. ces mots) . Le sens propre de ces mots est « en avant » .

（*Per* は、*prō* や *por-*、*prae* が所属し、又他方では *pri* や *prior*、*primus* が結びつく前置詞や動詞前接辞のグループの一部を成す。それらの語の本来の意味は「en avant（前方に）」である。）

— *DELL* (s.v. *per*, *prep.*) (一部省略・日本語訳筆者)

概念的に古典ラテン語 *prō* や *por-*、*prae* などと同じグループに属し、「前方」をプロトタイプ的な概念としていたことが伺える。古典ラテン語 *prō* が「前方」概念を示す一例として次記（３）が挙げられる。

- （３） Caesar legiōnēs *prō* castris collocāvit.
Caesar legions before forts set

→ Caesar set legions before forts. (カエサルは軍団を陣營の前に配置した)

— 泉井 (1952: 360) (イタリック・英語グロッサリー・英語訳・下線筆者)

現在のスペイン語前置詞 *por* にはこの「前方」概念は残っていないが、次の（４ a-b）に示されるように、接頭辞 *pro-* にその痕跡を留めている⁴⁾。

- （４） 「前に、先に、前方へ」の意。 ⇨ *profeta*, *prólogo*, *prolongar*.

— 『小学館 西和中辞典』 (s.v. *pro-*, *suffix*, 2) (下線筆者)

また、下例（５）が

- （５） Compré este libro *por* veinte euros.
(I) bought this book for twenty euros.

→ I bought this book *for* twenty euros. (私は 20 ユーロでその本を買った)

以下（６）の意味論的構造で捉えられることから明らかなように、

(6) Compré este libro *por* veinte euros .

↑
↑
 交換

(私は 20 ユーロと交換にその本を買った → 私は 20 ユーロでその本を買った)

現在のスペイン語前置詞 *por* は「交換」概念も表す。さらに、通常「代理」の意味用法として分類されている以下 (7) の文も

(7) ((代理)) …の代わりに.

Ella vino por su hija. 彼女は娘の代わりに来た。
 She came for her sister

→ She came *for* her sister.

— 『小学館 西和中辞典』 (s.v. *por*, *prep.*, **3**, 1)

(英語グロッサリー・英語訳・下線筆者)

以下 (8) の意味論的構造で捉えられることから明らかなように、

(8) Ella vino *por* su hija [vino] .

↑
↑
 交換

([彼女の娘が来る] という行為と交換に [彼女が来る] という行為をした)

「交換」概念の一種として捉えられる。そして、この「交換」概念は、下記 (9) に示されるように、現在のスペイン語接頭辞 *pro-* にも残っている。

(9) 「…の代わりに [の]」, 文法用語で「代…」の意. ⇔ *pro*consul, *pro*hijar, *pro*nombre.

— 『小学館 西和中辞典』 (s.v. *pro-*, *suffix*, 1) (下線筆者)

また、この「交換」概念は、以下 (10) に見られるように、古典ラテン語の時には既に存在していたことが伺える。

(10) Alcēstis *prō* Admētō marītō suō mortua est
 Alcestis in place of Admetus husband her died

→ Alcestis died *in place of* her husband Admetus.

(アルケステイスは、その夫アドメトゥスの代わりに死んだ)

— 泉井 (1952 : 360) (イタリック・英語グロッサリー・英語訳・下線筆者)

加えて、下例 (11) に示されるように、

- (11) Mi cartera debe estar *por* ahí.
my wallet must be around here

→ My wallet must be *around* here. (私の財布はこの辺りにあるはずだ)

古典ラテン語 *prō* には見られない「近接」概念が現在のスペイン語前置詞 *por* には存在する。

2.2 先行研究とその問題点

2.2.1 先行研究：日下部 (1971)

ここで、スペイン語前置詞 *por* (又は古典ラテン語前置詞 *prō*) および接頭辞 *pro-* に関し、以下 (1) の疑問が生じる。

- (1) a. プロトタイプの概念である「前方」から拡張概念である「交換」へと如何なる拡張現象が生じたのか？
b. 「前方」および「交換」概念と古典ラテン語 *prō* にはみられなかった「近接」概念との間には如何なる関係があるのか？

この疑問を解決する鍵の一つが英語前置詞 *for* である。以下 (2) に見られるように、

- (2) [←[俗ラ] *por* ← [ラ] *prō* 「…の前に；…のために；…によって」；関連 [仏] *pour*. [英] *for*. [独] *für*]

— 『小学館 西和中辞典』 (s.v. *por*, *prep.*) (下線筆者)

スペイン語前置詞 *por* は英語前置詞 *for* と関連がある語とされているが、事実、この英語前置詞 *for* は、次の (3) に示されているように、時代を遡ると「前方」概念を原義とするインドヨーロッパ祖語**per* に由来し、スペイン語前置詞 *por* と源を同じくしているこ

とが確認される。

(3) † 1 ((OE)) – ((15C)) [時間・空間] …の前に,

2 ((OE)) …の代わりに, のために, の故に

◆ OE *for, fore* 'FORE¹' < Gmc **fura* before (of place and time) , on account of (OFris. & OS *for* (cf. Du. *voor*) / OHG *fora* before, *furi* for (G *vor, für*) / ON *fyr, fyrir* / Goth. *faúr, faúra*) ← IE **per* before, forward (L *prō* before, for, instead of (⇒ PRO¹) ...

— 『英語語源辞典』 (s.v. *for, prep.*) (一部省略・下線筆者)

さらに、OE 期には既に「交換」概念を有していたことから、スペイン語前置詞 *por* および接頭辞 *pro-* と同様、まず、以下 (4) の意味変化を起こしたと考えられる。

(4) プロトタイプの概念：「前方」→ 拡張概念：「交換」

この英語前置詞 *for* の「前方」から「交換」への概念拡張について、日下部 (1971 : 84) では下記 (5) のような説明がなされている。

(5) 今日では *before* の意味は忘れられているが、おそらく或るものの前にそれに代って置かれるというような意味から代用、交換の意味が生れ … 今日では *for* の意義用法は非常に多岐に互っていて、その変遷の経路は必ずしも明らかではない。

— 日下部 (1971 : 84) (一部省略・下線筆者)

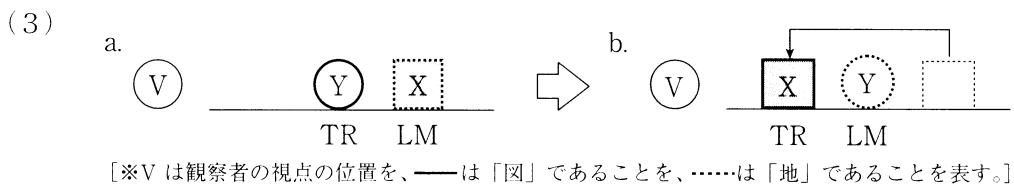
しかしながら、上記 (5) の説明では、「前に置く」ことが「代わりに置く」ことに如何に関係するのかが依然として明らかになっていないと言え難い。

2.2.2 先行研究Ⅲ：福森 (2007)

福森 (2007) では基本的に日下部 (1971) の考えを踏襲しつつ、それに図地分化 ([英語] Figure-Ground segregation / [西語] segregación de Figura y Fondo) の観点からの説明を加えることで、「前方→交換」への概念転移に対する論理的な理由づけを試みた。

以下（１）－（３）がそのまとめである⁵⁾。

- （１）「XをYの前方に置く」と、XとYとの位置関係が入れ替ることで、
- 本来「後方」に位置していたことで「地」として認識されていたXが前景化されることで「図」として認識されることになる。
 - 同時に、本来「前方」に位置していたことでは「図」として認識されていたYが背景化されて「地」として認識されることになる。
- （２）その結果、位置関係の「交換」が行なわれているのと同時に、「図」と「地」との「交換」も同時に行なわれる。

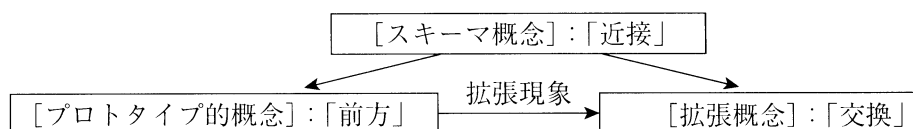


さらに、福森（2007）では、「前方」／「交換」と「近接」との間には、それぞれ下記（４）－（５）のような結びつきが存在することを論証した。

- （４）「前方」と「近接」との結びつき（the Me-FIRST orientationの観点と精神病理学の観点から）：
- ・人間は「前方」をより「身近」なものとして捉えている
- （５）「交換」と「近接」との結びつき（プロトタイプの交換行為の観点から）
- 物理的物体どうしの「交換」では、「存在位置」の点で互いに「近接」している。
 - 物理的物体どうしの「交換」では、「質や価値」の点で互いに「近接」している。つまり、「同種」の交換の方が「異種」のそれよりも容認度が高い。

その結果、次の（６）に示されるように、「前方」をプロトタイプ的な概念、そして「交換」をその拡張概念とし、さらに両概念のスキーマ概念として「近接」の位置づけを定義するに至った。

(6)



しかしながら、ここでは「前方」、「交換」、「近接」それぞれの間に見られる結びつきには如何なるプロセスが存在しているのか、という研究課題が残されたままである。この結びつきを解明するための鍵となるものが、隣接科学の一つである「社会学」および「人類学」における「贈与交換」儀礼の研究である。そこで、次の§3では、社会学および人類学における「贈与交換」儀礼の研究を観察することで、「前方」／「交換」／「近接」の概念間の結びつきを明らかにする。

注釈（§1および§2）

- 1) 「社会学」が定義の難しい学問の一つであることはしばしば言われている。私見では、その最大の理由は同時期にフランスとドイツの両国において「社会学」という学問を社会科学の一ジャンルとして別々に基礎づけようとした Emile Durkheim と Max Weber の両者の「社会学」の意味づけの相違によるところが大きい。誤解を恐れずに言えば、Durkheim は「全体は諸部分の総和以上である」という思考をもとに社会学を集団の支柱となる「制度」の学としたが、Weber は意志を持った諸個人の行為の結果現われた社会現象を社会学の対象と見なした（cf. Bendix and Roth (1971)）。このように初発の時点から「社会学」は一枚岩ではなかったのである。その後、「社会学」という言葉はその意味を統合されないまま、あまたの社会学を生み出すことになった。
- 2) 「人類学」は、下記（1）に見られるように、

（1） この分野における学問の区別のしかた、名称のつけかたが国によってすこしずつ違っているという事実であり、そのためおなじ名称が国によってまったく別の意味に使われるので、はなはだまざらわしい。

— 祖父江（1990：3）（下線部筆者）

「学問の区別のしかた、名称のつけかたが国によってすこしずつ違っている」ために、その定義が難しい学問の一つであると言える。

例えば、アメリカでは、「人類学（anthropology）」を「人間についての総合的研究」として位置づけており、さらに「自然人類学（physical anthropology）」、「先史考古学（prehistoric archaeology）」、「文化人類学（cultural anthropology）」の3分野に分けている。イギリスの場合は人類学を4つに分けており、アメリカの3分類に「社会人類学（social anthropology）」を加えている点で異なっている。

また、ドイツやオーストリアでは、「人類学 (Anthropologie)」と称するときにはアメリカやイギリスで言う自然人類学のみを指し、アメリカで言う文化人類学に相当するものとして「民俗学 (Ethnologie)」がある。この時、人類学は「生物学」に、また民族学は「人文科学」に属するため、両者を包括する概念が存在しない点で、アメリカやイギリスとは大きく異なっている。

さらに、日本ではその事情はいっそう複雑になっている。ごく簡単に言うと、戦前に日本に入ってきたのは、専らドイツやオーストリア流の考え方であったため、人類学といえは自然人類学を指し、社会・文化の面に関する研究は民俗学という名称が用いられるのが普通であった。しかしながら、戦後になって、アメリカの学問の影響が強く入ってくるとともに、文化人類学の名称の方がだんだんに普及して、ドイツやオーストリア流の用語と混在するようになった。そのため、現在では、民俗学と文化人類学という用語は並行して用いられ、それぞれの学者の好みに従って用いられていると言える。

本稿では、アメリカおよびイギリスにおける用法に習って、「自然人類学」、「先史考古学」、「文化人類学」(さらに「社会人類学」)を包括する概念として、「人類学」という用語を用いることにする。

- 3) スペイン語前置詞 *por* は古典ラテン語 *prō* が音位転換 ([英語] *metathesis* / [西語] *metátesis*) したものである。
- 4) 前置詞と接頭辞とは一見無関係のようにも見受けられるが、時代を遡ると、下記(1)に見られるように、

(1) 前置詞はギリシア語やラテン語においても近代の言語に劣らず豊富である。その多くはもともと副詞的な要素として名詞とは独立に働いていたが、徐々に名詞の一定の格との結びつきができて、前置詞という範疇ができた。それらはまたしばしば動詞の前綴りとして、合成動詞をつくる重要な役割を担っている。

— 風間 (1998: 164) (下線筆者)

いずれも副詞的な要素として働いていた語という同一の源に至ると考えられる。つまり、次の(2)に示されるように、

(2) 副詞的な要素として働いていた語 — $\begin{cases} \rightarrow \text{名詞一定の格と結びつく} \longrightarrow \text{前置詞} \\ \rightarrow \text{動詞と結びつく} \longrightarrow \text{接頭辞} \end{cases}$

副詞的な要素として働いていた語が名詞と結びついたものが「前置詞」であり、動詞の前綴りとして動詞と結びついたものが「接頭辞」であるということになる。

- 5) 図地分化の観点からの「前方」から「交換」への概念転移について詳しくは、福森 (2007: 61-65) 参照。

主要参考文献（§ 1 および § 2）

- Bendix, Reinhard and Roth, Guenther (1971) *Scholarship and partisanship : essays on Max Weber*, California : University of California Press.
- Cuenca, Maria Josep & Joseph Hilferty (1999) *Introduccion a la Lingüística Cognitiva*. Madrid : Ariel Lingüística.
- Lakoff, George & Mark Johnson (1980) *Metaphor We Live By*. Chicago : University of Chicago Press.
- Lakoff, George & Mark Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh : The Embodiment Mind and its Challenge to Western Thought*. New York : Basic Books.
- Sweetser, Eve E. (1990) *From Etymology to Pragmatics : Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*, Cabridge: Cambridge University Press.
- 泉井久之助 (1952) 『ラテン広文典』 白水社：東京.
- 上野義和・森山智浩・福森雅史・李潤玉 (2006) 『英語教師のための効果的語彙指導法 — 認知言語学的アプローチ —』 英宝社：東京.
- 日下部徳次 (1955) 『前置詞 (上)』 研究社：東京.
- 祖父江孝男 (1990) 『文化人類学入門』 (増補改訂版) (中公新書 560) 中央公論新社：東京.
- 玉野和志 (編) (2008) 『ブリッジブック社会学』 信山社出版：東京.
- 中村明德 (2004) 「高等教育の充実に向けて — いかに魅力ある授業を創り出すか — 」『太成学院大学紀要』 第6巻 (通号 23 号) pp. 43-48. 太成学院大学 (旧 南大阪大学)：大阪.
- 福森雅史 (2007) 『異言語間における動作主導入前置詞の概念研究 — スペイン語・ポルトガル語・英語を通して — 』 (大阪大學言語社會學會博士論文シリーズ Vol. 42) 大阪大学言語社会学会：大阪.
- 森山智浩・福森雅史 (2007) 「英語前置詞 for, by とイスパニア語前置詞 por の概念メカニズムへの認知的アプローチ — 異言語研究と教育 — 」『日本認知言語学会論文集』 第7巻 pp. 109-119. 日本認知言語学会：東京.

[辞書]

- Corominas : Corominas, Joan & José A. Pascual (1980) *Diccionario Crítico Etimológico Castellano e Hispánico*. Madrid : Editorial Gredos.
- DELL : Ernout, A & Meillet A. (1967) *Dictionnaire Etymologique de la Langue Latine Histoire des Mots*. (quatrième édition) , Paris : Librairie C. Klincksieck.
- 高垣敏博 (編) (2007) 『小学館 西和中辞典』 (第2版), 小学館：東京.
- 寺澤芳雄 (編) (1999) 『英語語源辞典』 (*The Kenkyusha Dictionary of English Etymology*), 東京：研究社.

3. 社会学および人類学における「贈与交換 (le don-échange)」儀礼の観点から見た「前方」／「交換」／「近接」概念の結びつき (高橋 紀穂)

筆者が知る限り、社会学および人類学の観点から「贈与交換 (le don-échange)」⁶⁾という活動を総合的かつ理論的に捉えた最初の学者は Marcel Mauss である⁷⁾。彼は Mauss (1950) に収録された論文 'Essai sur le don' において広範な資料を用い、未開民族や古代民族に見られる「贈与交換」儀礼について考察した。特に、アメリカ北西部における「ポトラッチ (Potlatch)」という主に集団内部で行なわれる競争的贈与交換儀礼と、トロブリアンド諸島の島々に長期にわたって財が駆け巡る「クラ (kula) 交易」という主に集団間で行なわれる贈与交換儀礼とを取り上げて論を進めている⁸⁾。

この「贈与交換」という行為は義務的なもので、その具体的条項には「贈る義務 (*l'obligation de donner*)」(cf. Mauss (1950 : 205))、「貰う義務 (*l'obligation de recevoir*)」(cf. Mauss (1950 : 210))、「返す義務 (*l'obligation de rendre*)」(cf. Mauss (1950 : 212))の三つの義務⁹⁾が存在する。まず、「贈る義務」から「贈与」という活動が行なわれる。そして、「贈与」活動では、「贈与」する者は贈り物を自身の「前方」へ移動させる、即ち「差し出す」という行為が行なわれる。例えば、「クラ交易」の具体例である次記 (1) には、「贈り物を競争相手や交渉相手の足下に投げる」ことが述べられている。

- (1) ... après avoir amené solennellement, et à son de conque, son présent, il s'excuse de ne donner que ses restes et jette au pied du rival et partenaire la chose donnée.

(… ほら貝の音とともに、荘厳に贈り物が運び込まれた後、彼は残り物しか送らないことを詫び、贈り物を競争相手や交渉相手の足下に投げる。)

— Mauss (1950 : 177) (イタリック・日本語訳・下線筆者)

このような場合、投げ手は自身の前方に相手 (の足下) が存在するような位置で立ち、相手 (の足下) に向かって、贈り物を投げるのが通常である。ここに、「贈り物の移動方向 = 前方」という概念が観察される。さらに、「ポトラッチ」の具体例である¹⁰⁾下記 (2) には、「競争相手のところにあらわれ、彼の面前で幾人かの奴隷の喉をかき切って殺すところを見せる」ことが述べられている。

- (2) ... il arrivait qu'un chef tlingit se présentât à quelque rival pour egorger devant

lui des esclaves.

(… トリンギト族の首長が競争相手のところであられ、彼の面前で幾人かの奴隷の喉をかき切って殺すところを見せるということがあった。)

— Bataille (1949 : 112-113) (イタリック・日本語訳・下線筆者)

このような場合、見せる側の者は自信の前方に相手が存在するように立ち、相手に向かって、「奴隷の喉をかき切る」という行為を示すのが通常である。そして、「奴隷の喉をかき切る」という行為自体が「贈り物」の一種であり、さらに、「或る行為を見せる」こと自体が贈り物を差し出す方法の一つであるとするなら、ここでもまた、「贈り物の移動方向＝前方」という概念が観察されることになる。

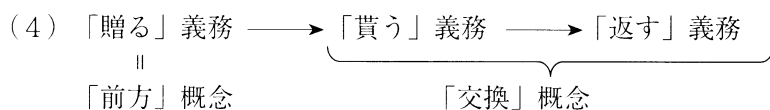
このように、上記(1)–(2)のいずれの場合においても、「贈与」と「前方」との間に存在する非常に密接な関係を示す以下(3)の行為が存在していると言える。

(3) 贈与する者は贈り物を自身の「前方」へ移動させる、つまり「差し出す」ことで「贈与」という行為を行なう。

さらに、残りの2つの義務(「貰う義務」と「返す義務」)により、何らかの物を貰った者はそれを、時にはそれ以上の物を返さなくてはならない。例えば、「ポトラッチ」においては、財を獲得した者はその財をことごとく皆の者に分配する(cf. Mauss (1950 : 208))場面が観察される。そこでは「財が或る共同体内部を移動する」という形で「貰う－返す」という現象が繰り返される。他方、「クラ交易」においては、贈られた財をさらに他の共同体に贈らねばならない(cf. Mauss (1950 : 175-180))。それ故、そこにも財が或る共同体間を常に循環するという形で「貰う－返す」という現象が観察されるのである。贈与儀礼にはこのような性格が存在することから、Maussはそれを「*prestations totales* (全体的給付組織)」(cf. Mauss (1950 : 154))と呼んでいる。

こうした「贈る－貰う－返す」という義務を持つ「贈与交換」儀礼は、我々が「互いにそれぞれの物を取り換えること。また、互いにやりとりすること。」(cf. 『明鏡国語辞典』(s.v. こう - かん【交換】、①))という意味で通常用いている「交換」とは等価とは言えない¹¹⁾。しかしながら、「返す」という義務を伴う以上、それは「交換」概念の下位範疇に属するものである。このことから、「贈与」行為は、最終的には「交換」行為に至ると言える。ここに、スペイン語前置詞 *por* および接頭辞 *pro-* のプロトタイプの概念である「前

方」とその拡張概念である「交換」との繋がりを見ることができる。これを次記（４）としてまとめる¹²⁾。



さらに、前出の具体例（１）－（２）（以下に（５）－（６）として再掲載）からは、「贈与交換」儀礼における「贈る者」と「贈られる者」との間に存在する「近接」性を見ることがもできる：

- (5) ... après avoir amené solennellement, et à son de conque, son présent, il s'excuse de ne donner que ses restes et jette au pied du rival et partenaire la chose donnée.

（… ほら貝の音ともに、荘厳に贈り物が運び込まれた後、彼は残り物しか送らないことを詫び、贈り物を競争相手や交渉相手の足下に投げる。）

— Mauss (1950 : 177) (一部省略・イタリック・日本語訳・下線筆者)

- (6) ... il arrivait qu'un chef tlingit *se présentât à quelque rival pour egorger devant lui des esclaves.*

（… トリンギト族の首長が競争相手のところにあらわれ、彼の面前で幾人かの奴隷の喉をかき切って殺すところを見せるということがあった。）

— Bataille (1949 : 112-113) (一部省略・イタリック・日本語訳・下線筆者)

例えば、「クラ交易」の具体例である上記（５）では、「贈り物を競争相手や交渉相手（の足下）に投げる」ことが述べられている。この場合、投げ手は相手に（投げる行為で対象物が届く範囲に）「近接」していなければならない。また、「ポトラッチ」の具体例である上記（６）では、「奴隷の喉をかき切って殺すところを競争相手に見せる」ことが述べられている。この場合にも、見せる側の者は相手の視界内に存在する形で「近接」していなければならない。なぜなら、両者が1 km も 2km も離れていては、相手（の足下）に贈り物を投げることも、奴隷の喉をかき切って殺すところを相手に見せることも叶わないからである。

さらに、「贈与交換」の際に用いられる贈り物にも「近接」性を見ることができる。「クラ交易」において贈られる物は「ムワリ (mwali)」と呼ばれる腕輪と「スーラヴァ (soulava)」と呼ばれる首飾りである。「ムワリ」は島々を西から東へ、「スーラヴァ」は逆に東から西へと循環する (cf. Mauss (1950 : 178-179))。ここで重要なことは、これらが両方とも生活必需品ではなく宗教的色彩の強い装飾品という同質のものであるという事実である。また、「ポトラッチ」においても「贈与交換」される物の質には共通点がある。先に引用した「奴隷」の他に、Mauss は「ポトラッチ」で贈られる物に次記 (7) を挙げている。

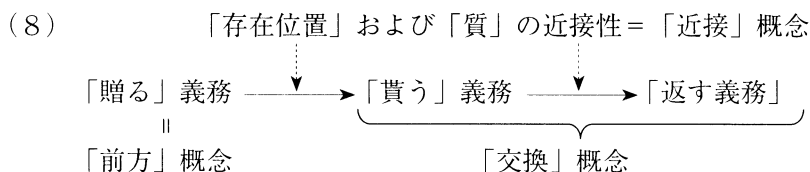
- (7) Les grandes coquilles d'*abalone*, les écus qui en sont couverts, les ceintures et les couvertures qui en sont ornées, les couvertures elles-mêmes blasonnées, couvertes de faces, d'yeux et figures animales et humaines tissées, brodées.

(大きなあわびの貝殻、それでおおわれた楯、それで飾られた帯や毛布、動物や人の顔、目、姿態を織り込み、刺繍した紋章入りの毛布。)

— Mauss (1950 : 219-220) (日本語訳筆者)

これらは「クラ交易」で贈られる物と同様、生活必需品ではなく宗教的色彩の強い装飾品である¹³⁾。このことから、「ポトラッチ」においても「贈与交換」の対象となるものどうしに「近接」性が確認されるのである。

既に、§ 2.2.2. で見たように、「言語学」の観点からでは、「前方」、「交換」、「近接」の各々の概念間に存在する個別的な結びつきには如何なるプロセスが存在しているのか、という研究課題が残されたままであった。しかしながら、社会学および人類学の観点から三者の関係を見つめ直すことで、そこには「贈与交換」儀礼を共通の基盤とした「前方」、「交換」、「近接」の各々の概念間の結びつきが存在することが明らかになった。この関係を次記 (8) としてまとめる¹⁴⁾。



ここに、スペイン語前置詞 *por* および接頭辞 *pro-* の「前方」／「交換」と「近接」との間に存在する繋がりを見ることができるのである。

但し、ここで気を付けなければならないことが一つある。それは、これら「ポトラッチ」や「クラ交易」を始めとする「贈与交換」儀礼は未開の地の習慣的儀礼であって、我々を取り巻く現代社会とは全く関係がない、とする誤った捉え方である。なぜなら、これまで観察してきた「贈与交換」儀礼は、現代社会において貨幣を用いて行なわれる経済的取引に直接先行する本質的な社会活動として見なし得るからである¹⁵⁾。例えば、以下(9)に引用した 'Essai sur le don', Introduction の一節は、「贈与交換」儀礼と我々の社会（とりわけ経済システム）との間には強いつながりが存在する、というモースの主張を端的に表したものだと言える。

- (9) D'une part, nous arriverons à des conclusions en quelque sorte archéologiques sur la nature des transactions humaines dans les sociétés qui nous entourent ou nous ont immédiatement précédés.

(一方で、我々は、我々をとりまく社会、あるいは、すぐ以前の社会における人類の取引の性質についてのいわば考古学的結論に到達するであろう。)

— Mauss (1950 : 148) (一部省略・日本語訳筆者)

以上、社会学および人類学の観点から、「贈与交換」儀礼を共通の基盤として、「交換」概念が「近接」と「前方」という各々の概念と密接な関係を持つことを論述した。さらに、忘れてならないのは「「贈与」は「交換」に帰着する」という事実である。「質や価値」としても「距離」としても「近接」し、「前方」へと差し出された贈り物は — 全く同じ物、あるいは同等かそれ以上の価値を持つ物となって — いずれそれを贈った者に戻ってくる — 我々はこのことに注目すべきである。そうすれば、この「贈与」から「交換」への移行は、まさにスペイン語前置詞 *por* および接頭辞 *pro-* の「前方」から「交換」への概念拡張と平行な関係にあると言うことが可能となるのである。

注釈 (§ 3)

- 6) 本稿では、論をよりわかりやすくする進めるために、「贈与」、「交換」、「贈与交換」の用語を各々以下のように定義する。

(1) a. 「贈与 (don)」とは、贈り物をして、お返しがない、または極めて少ない場

合。

- b. 「交換 (échange)」とは、贈り物を受け取り、それと全く同じ物、あるいは同等かそれ以上の価値を持つ別の物を他の人あるいは他の集団に渡すこと。
- c. 「贈与交換 (le don-échange)」とは、「贈与」と「交換」とを合わせ持ったものとする。

- 7) 筆者が知る限り、人類学および社会学において「贈与と交換」現象を最初に捉えた人物は Malinowski である。Mauss もまた、彼の資料を大いに参考にしている。しかしながら、「理論的」という観点を考えれば、やはり Mauss の方が精緻かつ緻密な研究を行なっていると考えられる。彼の理論が Lévi-Strauss の構造人類学に影響を与えただけでなく、Caillois や Bataille の「聖なる社会学」や Baudrillard の「消費社会論」等の理論構築に寄与したことを考慮すれば、この見解は妥当性を持つであろう。(cf. Bataille (1967)、Baudrillard (1975)、Caillois (1988)、Malinowski (1922))。
- 8) この議論は、その後、Claude Lévi-Strauss へと引き継がれる。彼は Jakobson などの言語学と Mauss の議論を結びつけ「構造主義人類学」を打ち立てた (cf. Lévi-Strauss (1948))。他方、同時期、Georges Bataille や Roger Caillois が Lévi-Strauss とは違った視点、すなわち、贈与の中に見られる「破壊」的要素に注目する形で Mauss の議論を引き継いでいる (cf. Bataille (1949)、Caillois (1939))。また、日本では 80 年代、経済人類学者の栗本慎一郎が上記の人々の議論を消化しつつ、そこに Karl Polanyi の議論を保持した形で独自の理論を形成した (cf. 栗本 (1979))。以下、本稿では、これらの人々の議論を参考にしながら論を進めていくことにする。
- 9) これらの義務は「ポトラッチ」に関するものだが、それはそっくりそのまま「クラ交易」にも当てはまるものである (cf. Le kula est une sorte de grand potlatch (クラは一種の巨大なポトラッチである) (Mauss (1950 : 176)))。
- 10) 競争的贈与である「ポトラッチ」はその競争的性質の故に、白熱すると贈与を通り過ぎ、富の破壊の見せ合いへと至る。そのため本論 (2) に見られるような事態が起こるのである。破壊や殺戮を見せられた者はお返しに同程度かそれ以上の破壊や殺戮を行なう。そして、それを見せられた者は再び破壊や殺戮を見せつける … ということが繰り返されるのである (cf. Mauss (1950 : 164-169) , Bataille (1949 : Chapitre 2))。
- 11) 例えば、これらの活動は「最初に贈与がある」という点だけでなく、「功利主義の範疇に入れるには程遠い」(cf. Mauss (1950 : 266)) という点においても、それは近代社会における「交換」への認識とは大きく異なっている。
- 12) 本論 (4) 内の「交換」という用語は、脚注 6 で定義した「交換」の意で使用している。
- 13) Bataille (1949 : 123) では、“Essentiellement les dons sont des objets de luxe” (本質的に贈物は奢侈品である) と述べられているが、社会学的に言えば、「ポトラッチ」であろうと

「クラ交易」であろうと、贈り物とは「宗教的根源 (principe religieux)」(cf. Mauss(1950 : 221))、つまり「聖なるもの (sacra)」(cf. Mauss (1950 : 216)) であると考えられる。

- 14) 本論(8)内の「交換」という用語もまた、脚注6における「交換」の意で使用している。
- 15) この「ポトラッチ」や「クラ交易」のような「贈与交換」儀礼が、或る集団のメンバーあるいは諸集団全体にわたって浸透していることから、Mauss はこのような社会的な仕組みを簡潔に “les faits sociaux totaux” (全体的社会事実) (cf. Mauss (1950 : 274)) と呼んでいる。

主要参考文献 (§ 3 : 但し、§ 1 および 2 で既に掲載した文献名は除く)

- Bataille, Georges (1949) *La part maudite*, Paris : Minuit.
- Baudrillard, Jean (1975) *L'échange symbolique et la mort*, Paris : Gallimard.
- Berger, Peter Ludwig and Thomas Luckmann (1966) *The Social Construction of Reality*, New York : Doubleday.
- Blau, Peter Michael (1964) *Exchange and Power in Social Life*, New York : John Wiley & Sons.
- Caillois, Roger (1939) *L'homme et le sacré*, Paris : Gallimard.
- Lévi-Strauss, Claude (1948) *Les structures élémentaires de la parenté*, Paris : Presses Universitaires de France.
- Lévi-Strauss, Claude (1962) *La pensée sauvage*, Paris : Plon.
- Mauss, Marcel (1950) *Sociologie et Anthropologie*, Paris : Presses Universitaires de France.
- Malinowski, Bronislaw (1922) *Argonauts of Western Pacific*, London : George Routledge & Sons.
- 上野千鶴子 (1985) 『構造主義の冒険』 勁草書房 : 東京.
- 栗本慎一郎 (1979) 『経済人類学』 東洋経済新報社 : 東京.
- 栗本慎一郎 (1990) 『幻想としての経済』 青土社 : 東京.
- 橋爪大三郎 (1988) 『はじめての構造主義』 (講談社現代新書 898) 講談社 : 東京.

[辞書]

- 北原保雄 (編) (2002) 『明鏡国語辞典』 大修館書店 : 東京.

4. 前置詞および接頭辞概念と外国語教育 (福森 雅史)

最後に、状況に応じて適切に語の意味用法を選択する語用能力を育成する上で、これまで観察してきたような「意味変化のプロセス及び多義性のメカニズム」が如何なる役割を果たすのかを明らかにするために、本稿で論じた概念メカニズムを用いた指導とそれを用いない指導との間には、如何なる習得結果の差が生じるのかに関する実験を行なった。まず、スペイン語初学習者に対し、下記(1)の実験を行なった：

(1) 日時：2008 年 9 月 26 日（1 回目）、10 月 10 日（2 回目）、10 月 24 日（3 回目）

場所：近畿大学 15-4 教室および 15-5 教室

対象者：日本語を母語とする近畿大学法学部「スペイン語総合 2」を受講しているスペイン語初習学習者 207 名

設 問：接頭辞 pro- を持つ次の 30 単語の意味を書きなさい。

対象語：proceder（出る）、probabilidad（見込み）、probable（ありそうな）、probar（試す）、problema（問題）、procedencia（起源、出身）、proceder（由来する）、procedimiento（方法、手段）、procesamiento（起訴）、procesar（起訴する）、proceso（過程、経過、訴訟）、producción（生産）、producir（生産する）、profecía（予言）、profesor（先生）、profundo（深い）、progresar（進歩する）、progreso（進歩）、prólogo（序文）、prolongar（延ばす）、promesa（約束）、prometer（約束する）、pronombre（代名詞）、pronunciar（発音する）、propaganda（宣伝）、proponer（提案する）、prospectivo（将来の）、prosperar（繁栄する）、proyección（発射）、proyecto（計画）＜以上 30 単語＞

方 法：① 30 個のスペイン語の単語とそれに相当する日本語訳の書いた紙を配布し、覚えるように指示を出す。そして、翌週に、単語テストを行なう。この時、各単語の意味の捉え方に関する解説は行なわない。

② 再度テストをすることは告げず、1 回目のテストの 2 週間後に 2 回目の単語テストを行なう。

③ 2 回目の単語テスト後、§ 3. の説明と、各単語の意味の捉え方の解説を行なう。

④ 3 回目のテストをすることは告げず、2 回目のテストの 2 週間後に 3 回目の単語テストを行なう。

⑤ 但し、1 回目、2 回目、3 回目のテストでは、同じ 30 単語を扱っているが、それぞれの単語の出題順は全て異なっている。

結 果：① 1 回目の単語テストの平均点：26/30 点

② 2 回目の単語テストの平均点：11/30 点

③ 3 回目の単語テストの平均点：22/30 点

まず、何の解説もせずに、30 個のスペイン語の単語とそれに相当する日本語訳を書いた紙を配布し、それを覚えるように指示した。その時には「小テスト」を受けるという気持ちがあったためか、その平均点は 26/30 点と非常によいものであった。しかしながら、その 2 週間後に、再テストをすることを告げずに行なった 2 回目の単語テストでは、平均点 11/30 点に下がった。この結果から、一時的な記憶はなされたものの、それはあくまで一時的なものに過ぎず、記憶の定着にはあまり結びつかなかったことが推測される。さらに、その 2 週間後に、再テストをすることを告げずに行なった 3 回目の単語テストを行なった。しかしながら、今回は、2 回目の単語テスト後に § 3. の説明と、各単語の捉え方の解説を行なっている点が 2 回目とは異なっている。そして、その結果は平均点 22/30 点と非常に向上したことが観察された。確かに、既に同様のテストを 2 回行なっているとはいえ、これだけ平均点が上がったのは、やはり 2 回目の単語テスト後に行なった解説によって記憶の定着が図られたからだと推測される。

以上の実験結果から、概念メカニズムを用いた指導をした場合の方が、それを用いない場合に比べて、単語がより確実に記憶に定着されているという結果が得られた。このことから、認知言語学の立場に立脚した概念メカニズムを用いることで、より効果的な語彙指導ができるのではないかと結論づけられる。さらに、特定の一分野のみに偏重した視点からの一方向的な研究に限定するのではなく、少なくとも言語の本質を明らかにするためには、隣接科学をも融合した形での多方向からの視点による研究が必要不可欠だと考えられる。なぜなら、こうした研究こそが、新しい視点からの説明を与えられることで、学習者にとってもより論理的な理解が可能となるだけでなく、知的好奇心をも刺激されることで、学習自体に対する意欲も向上すると考えられるため、本稿の冒頭に挙げた FD 課題を解消する鍵の一つになると言えるからである。